

令和5年度 前期日程

「小論文（国際学部国際学科）」の出題意図

いわゆる「多文化共生」を理解するにあたって、ごく一般的な正論 — 「諸民族・諸文化の共存という人類の夢、というより当面する適切な要請のためには、この閉鎖的な一面 [特定の風土と集団的記憶と結びついた文化の共同体としての民族] を克服し、民族という文化共同体をもっと開かれたものにしてゆかねばならない」 — をあらためて吟味することを意図した問題である。

評価の基準：

1. 著者の主張を要約できているかどうか。

著者は「民族間の敵意と紛争を生み出す差異としての民族文化が、同時に、主体として環境世界と他者と交わる能力を人間に与える基盤だ」と考えており、「われわれはおのれの属する文化を通じてしか世界に到達することができない」と主張する。なぜなら「人類の共通文化」をめざしたところで、じつはそれが「ひとりの個の生きる人格的基盤になりえないばかりでなく、世界を平板化し創造の源泉をからさずにはおかぬ」と考えるからである。そのうえで「ナショナルなものを媒介にせずにはインターナショナルに通じえないという逆説をいかに切開するか」を「われわれの課題」して提示する。

これにたいする著者の回答はけっして明瞭ではない。「風土に根ざした文化を壊滅させ」「古き民族主義の亡霊を喚び起こしている」原因を「経済という名の化物」と特定しているが、必ずしもその具体的な解決策までは提示していない。ただ、さしあたって民族が「適当な距離を保ちつつ、それぞれの国土に棲み分けられている」状態を望ましいすがたとして示していることには言及すべきであろう。

2. 以上の主張にたいして、賛否いずれの立場をとってもよいが、それぞれに説得的な具体例と論理展開がなされているかどうか。

否定派であれば、たとえば、ヒト・モノ・カネ・情報などが容易に・瞬時に国境を越えるグローバリゼーション下にあつて、はたして「国土の棲み分け」がどれほど現実的かを指摘してもよい。また「国土の棲み分け」は各集団内にてアイデンティティの強制・強要をもたらし、結局は民族間の紛争を誘発する土壌になりかねない、独裁国家の強権体制の正当化に利用されかねない、などといった点を指摘してもよい。

賛成派であれば、「人類の共通文化」を求めることがかえって古い民族主義を呼び起こすことになる点（欧州の移民・難民排外運動）を指摘したり、異文化の融合・混血（クレオール文化）が結局は「新しい民族文化」を作りだすだけで問題を根本的に解決できるわけではないという点などを指摘してもよい。